

3. 1 1 水戸二高の惨状

水戸第二高等学校 岡村 典夫

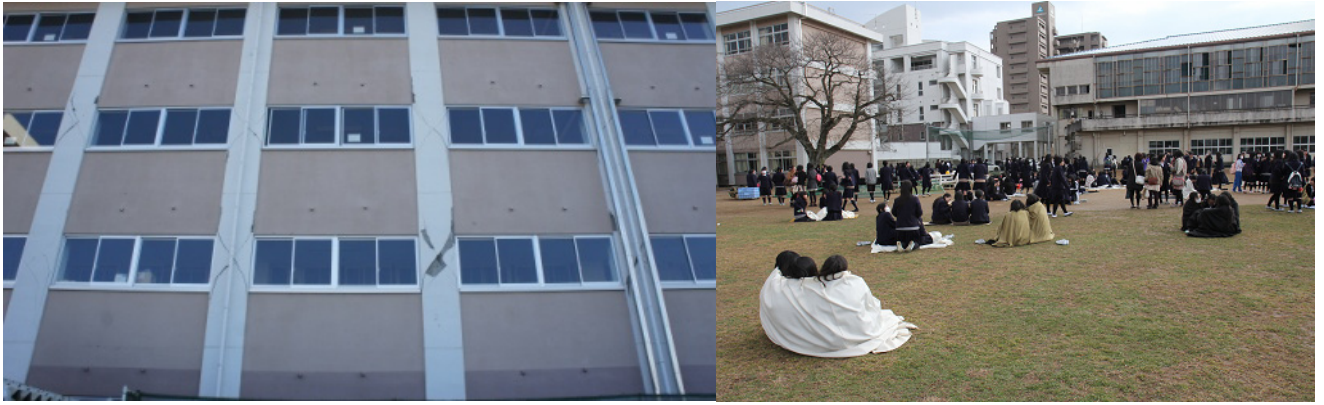
その時、水戸二高では6時限目の授業を迎えていた。私は授業が無かったので、地学準備室で遊びに来ていた卒業生2名とソファに座って話をしていた。外は寒かったので、ガスストーブで暖を取りながら。まさに、年度末の至って普通の日常だった。

その揺れは、ゆったりとしたものだった。P波は感じなかったので震源が遠い地震か震源がとても深い異常震域だと思った。「震源が浅ければ震央に近いところは被害が出るかもしれない、ちょっと大きめの地震かな」という感じだった。2日前も東北で比較的大きな地震があったことが頭を過ったが、「いつもの地震だ、すぐに収まるだろう」と軽く考え、卒業生たちと他愛のない会話を続けた。しかし、その揺れはどんどん大きくなり、いろいろな物が落ち始めた。「ちょっと大きいな、水戸で最高震度になるかな」と相変わらず軽い考え。棚が動き始め、卒業生や教室の生徒たちの悲鳴を聞いて、やっと事の重大さに気づき冷蔵庫の上にある望遠鏡を落ちないように両手で押さえた。揺れがゆっくりとしていたので、立ってられないということはなかった。ストーブが気になって見てみると耐震装置が働かず、火が消えていない。ストーブが動いて周囲には燃えやすいものがあつたので、ストーブの上のやかんをおろしながら火を止め、再び望遠鏡を抑えながら「止まれコノヤロー」と無駄なことを叫んでしまった。とても長い時間揺れていたような気がした。

やっと揺れが収まって外に出ようとするが、机や棚が出口を塞いでいる。机は何とか乗り越えられそうなので、卒業生の手を引いて準備室から脱出。地学室の入口は、棚の上に保管しておいた大量の木材と重ねておいたロッカーが落ち完全に塞がれていた。逆の教室側を見ると1学年主任が教室から出てきて、「どうしますか」と聞いてきたので、すかさず「外に出しましょう」叫んだ。荷物を持たずにすぐに外に出よう他の教員たちとグラウンドに誘導した。1名が足に軽い打撲を負っただけで大きなけがもなく全員が無事だったのは幸いだった。

生徒を外に出した後、これは記録せねばなるまいと思い、地学準備室に戻りカメラを取り出した。誰一人いなくなった校舎の写真を写しながら回ってみた。特に2号館は大きく破壊され2階と3階の柱には剪断破壊によるX字型の割れ目が走り、一部鉄筋が見えていた。この状態では、コンクリートは完全に断裂しているので強度はほとんど無く





て、鉄筋のみで支えていると分かった。よって、この校舎は使い物にならないと判断できた。

どの部屋も物が散乱して大変な状態だった。勿論わが地学室もガラスの入ったロッカーが落ち、ガラス片は散乱するは、テレビは落ちるはと大変な状況だった。おおむね見終わったので、外に出て生徒たちのもとへ。多くの生徒が余震の度に怯えていたので、安心させようと生徒たちの間に入って、声をかけながらいると、大きな余震が来た。体育館の壁の一部が落ちた。その余震で何名かの生徒がパニックに陥ってしまった。パニックに陥った生徒は最も安全であろうと思われる平屋の秀芳会館に運んだ。また、生徒の間に入って他愛もない話をしながらいると、ある生徒が「日常って本当にありがたいのですね。」と言った。

一方、外気温は低く生徒たちが震えだした。600 名以上の生徒が避難しているので、段ボールやわずかばかりの毛布では全く足りない。すると、先生方が暗幕やカーテンを外しだした。確かに暗幕なら保温効果が期待できる。それらを生徒たちは被って何とか寒さを凌いでいた。しかし、あたりが暗くなり始めると一層気温が低下してきたので、ちょっとした亀裂は入っているが殆ど損傷が見られない 1 号館に生徒を収容することに決めた。ただ、いつ大きな余震が来るかわからないので、すぐに逃げられるよう 1 階および 2 階のみに入れ、すべての部屋の出入り口は開けたままにしておいた。幸い、電気のいらないだるまストーブが数台あったのでそれらを倒れても火事になるリスクの少ない玄関に置いて暖をとるようにした。我々教員は校長室や事務室、外にも待機所を作って交替しながら詰めていた。生徒の帰宅に関しては生徒だけで帰さないように決め、親が迎えに来た場合のみ帰すようにしたので暗くなっても多くの生徒が残っていた。

さらに、一般の市民の方々が避難をしてきた。車いすに乗った老人や小さな子供を連れのお母さん。車いすで老人を連れてきた警官はすぐに車いすを返すように要求、仕方なく保健室のベッドに老人を寝かせ車いすを返却、次に赤ちゃん用のオムツを要求された。そんなものがあるわけがない。再び保健室に行って何かないか聞いたところ生理用のナプキンしかないとのこと。それで、何とか凌いでもらった。避難してきた方々には、玄関のストーブの近くにパイプ椅子を用意して座っていただいた。そうこうしているうちに、親が生徒を迎えに来るので、生徒を捜し親に引き渡す作業が入るなど忙しく働いているうち



にふと、避難所とは何なのかと疑問が湧いてきた。備蓄している水や食料があるわけでもなく、我々教員は何の訓練もしていない。一般の方々を受け入れる準備も何もなく、どこからの支援もなく精一杯要求に応えるだけだった。何かあったら、個人の努力によって勝手にやってくれと言うシステムだ。恐らく、我々もそうだったように行政もこんな大災害が来るわけがないと高をくくって何の準備もしてこなかったからだろうと思い、自分にも行政にも腹が立った。自衛隊のヘリぐらい飛んできて良さそうなものだった。そろそろ灯油が切れるかもしれないと思って、ストーブの給油に行くと避難している方々に本当にすまなそうに「ありがとうございます」とお礼を言われ、何とも複雑な気持ちになった。

他の職員と交替して休憩時間になると、息子とメールで連絡を取ることができ家族の無事を知ることができた。1人暮らしの母には携帯電話では全く連絡が取れず、NTTの公衆電話から夜10時頃になってやっと連絡ができた。家も本人、兄たちの無事も知ることができ涙が止まらなかった。このときに教員として生徒たちや避難している方々の面倒を見ている時は、心配事や不安な気持ちを忘れることができるのだと気づいた。地震被害の状況が知りたかったので、そのまま学校へ帰らずにNHK水戸放送局へ向かった。そして、テレビが伝えていた映像は津波が町や田畑を飲み込んで行く様子だった。その映像を見てさっきの腹立ちが本当に恥ずかしくなった。水戸や水戸二高の被害なんて東北と比べられないほど小さい。自衛隊は東北だけで精一杯だ。

学校に帰る途中ふと空を見上げると、水戸では見たことがない満天の星空が見えた。ここで、望遠鏡を出して天体観測を始めては不謹慎だろうと思い自粛はしたが、車の屋根を利用して固定撮影を試みた。



そして、生徒の迎えも一段落した午前2時に校長に帰宅許可を頂き、自宅へ帰った。当然、常磐道は通行止めなので、国道6号を帰ることにしたのだが、信号がすべて消えているので本当に怖かった。石岡の手前で渋滞にはまったので、岩間街道を迂回し2時間かけてつくばの自宅へ帰った。女房と子供たちは寝ていたので静かに歯を磨き、ベッドに入った瞬間電気がついてびっくりした。